建国五十周年に「紅都」を訪ねる

——人民共和国の雛形となった中華ソビエト共和国の首都・瑞金

加藤千洋

建国五十周年を機に、前々から一度は訪ねてみたいと考えていた革命根拠地、江西省の瑞金に行ってきた。

一九四九年十月一日の中華人民共和国の誕生を逆上ること十八年、一九三一年十一月に中国共産党が最初につくった「国家」が産声を上げた。その中華ソビエト共和国の臨時中央政府の首都になったのが瑞金である。

中華ソビエト共和国は三七年秋の第二次国共合作の成立で解消されるまで約六年間維持された。ただ紅軍の主力はそれより早く三四年の秋、国民党軍の包囲攻撃の圧力を受けて瑞金を離れ、革命史に名高い長征の途についていた。

中国大陸を西に大きく迂回して一万二千五百キロの難行苦行の末、一年がかりでたどり着いたのが陝西省北部。延安を中心に築かれた根拠地は新中国誕生まで続いた。それゆえ瑞金と延安は中国革命で特別の意味の持つ聖地であり、とくに瑞金は「紅都」と呼ばれている。

さてその瑞金まで、北京からの道程は案外遠かった。

江西省の省都・南昌まで空路で約二時間。そこから一気に南下して省南部の中心、贛州まで四百数十キロ、車で八時間ほど。九七年に開通した北京と香港の九龍を結ぶ南北の大動脈、京九鉄道を利用する手もあるが、適当な時間帯の列車便がない。

贛州は中国革命でも重要な土地だが、二千年を超える歴史を持つ古都でもある。江西省の略称を「贛」というが、その由来となった大河・贛江の上流部に位置する。この町で章水と貢水という二本の川が合流し、ここから一本になって北上するのが「章」と「貢」を合体した「贛」江なのである。

さて旅の目的地、瑞金へ急がねばならない。

贛州に一泊して翌朝六時半に車で出発。本来のルートならば、貢水に沿って真東に百四十キロほど

の距離なのだが、あいにくこの道が全面改修中で走れない。そこで南に三百六十キロ余りを、半日がかりで迂回せざるを得なかった。時折頭を車の天井にぶつけそうになるガタガタの山道で、「現代版の長征」といった趣がないではなかった。

それもそのはず、この路線沿いにある信豊、安遠、会昌といった県城は、その昔、実際に紅軍兵士がわらじばきで歩いた長征コースに当たっていた。

沿線は初夏の緑あふれる純農村だった。農家の庭先や街道沿いに白い花をつけた、ひょろひょろと伸びた木が目についた。桐油（アブラギリ）の木だと教えられた。ピンポン玉を少し大きくしたくらいの種からしぼる油は、紙に塗れば防水効果があり、紅軍兵士の必携品だったとか。

地形は赣州から緩やかに上りになっており、高度をますほどに土地は痩せていくように見えた。農家の構えもだんだんに小さく、粗末になる。折しも田植えの季節で、田植え人の姿があったが、ほとんどが女性と年寄りだ。機械の類いはまったく見られず、腰を深く折っての重労働である。

瑞金に到着後、役所の人に訳を聞いて納得したのだが、地図を見て分かるとおり、瑞金は江西省といっても東のはずれで、すぐ隣は福建省だ。山道にしてはやけに多くの中型バスとすれ違って不可解に思ったが、それらは福建省の沿海部の都市や町とを結ぶ路線バスだ。瑞金周辺の農村部の男たちは現金収入の魅力に引きづられ、市場経済化がすすんで低賃金労働者を必要とする私営企業や建設現場などに出稼ぎに出かけている。山道を駆け抜けるバスは、出稼ぎ者の交通手段にもなっている。

さて瑞金は周囲を低い丘陵に囲まれた盆地にあった。江西省と福建省との境は、お茶の産地として名高い武夷山脈。瑞金はその西麓に位置する。人口は五十七万人。その九割以上が客家（ハッカ）の人々だという。漢族の一つの方言グループを形成する彼らは、元々は黄河流域に住んでいたが、相次ぐ戦乱を避けて南中国に移り住んできた人々といわれる。

瑞金は最近、県から県級の市に昇格した。地名の由来は唐の時代に金が採れ、その管理機関として「瑞金監」が置かれたからだというが、この辺鄙な山里が歴史的に有名になったのは、やはり革命根拠地が築かれたためだろう。

その革命旧跡は約二百か所もあるが、主に二つの地域に集中している。中心部から北東へ五キロほどの葉坪旧址群と、南西へ四キロほどにある沙州坳旧址群である。

中華ソビエト共和国を誕生させた中華ソビエト第一次全国代表大会は葉坪で開かれた。三一年十一月七日から二十日まで二週間の大

◀中華ソビエト第一次全国大会の会場が往時の姿のまま残っている（江西省瑞金市葉坪にて）
▼中華ソビエト第一次全国大会会址（江西省瑞金市葉坪にて）

会後、毛沢東を主席とする中華ソビエト共和国臨時中央政府が発足し、正式に首都となった。

大会会場となった建物は、謝という豪農一族の先祖を祀る廟堂だった。「ほぼ当時のままに保存されてます」と案内の人は言ったが、瑞金は後に国民党軍に攻め落とされており、その折に破壊された場所も多い。後から補修されて往時の面影を取り戻したという場所も多いようだ。

大会会場となり、その後は臨時政府が置かれた建物は三百年以上の歴史を持つ。謝氏も客家だったので、屋根の形や外壁が独特である。広さは三百平方メートルほど。当初、謝氏は共産党の借用申し込みに首を振らなかったが、重ねての依頼に折れ、祀っていた先祖の位牌を他に移して提供したそうだ。

天井の高い建物で、中央に大会を開いた広間があり、両側に板壁

で仕切られた小部屋が十ほど並んでいる。それが臨時中央政府の役所のオフィスで、財政部、外交部、工農検察部、労働部、軍事部、内務部といった看板がかかっている。それぞれ誰が責任者であったかも紹介されている。

初代外交部長は王稼祥だ。彼は人民共和国の建国後も初代ソ連大使、外交部副部長、党中央対外連絡部長と一貫して外交畑で重責を担った。軍事部は国防部に相当するのだろうが、初代部長は朱徳将軍。内務部長には曾山の名が見える。いま江沢民国家主席の側近中の側近とされる、曾慶紅政治局候補委員の父親で、解放後の上海市副市長になった人物である。

ほかに毛沢東、周恩来、張国燾、鄧子恢、董必武ら当時の幹部たちの事務室もあるが、鄧小平の名が見当たらない。彼は当時は瑞金県党委員会書記という「地方幹部」に過ぎず、大会参加者の名簿にもその名が見当たらない。郷土史家の解説では大会代表の宿泊所や物資の手配など、もっぱら裏方の仕事を担当していたという。

この中央政府を囲むようにして、郵政局、図書館、国家銀行、総工会、新華社の前身の紅色中華通信社などの建物が並ぶが、面白いのは現在の北京の天安門広場に相当する空間もあることだ。紅軍広場と呼ばれており、人民英雄記念碑に相当する紅軍烈士記念塔、天安門城楼に当たる閲兵台もある。瑞金を首都としたソビエト共和国は後に誕生することになる人民共和国の、さまざまな意味では重要な「雛形」になったのである。

沙州坳には二千人が参加して開かれた第二次大会（三四年一月二十一日―二月一日）の会場跡がある。八角形の特徴のある建物で、上から見ると紅軍兵士の帽子によく似た形だそうだ。

ほど近い所に中央工農紅軍総政

中華ソビエト第二次全国大会会址
（江西省瑞金市沙州坳にて）

鄧小平が機関紙「紅星報」の編集をしていた時の事務室兼住宅（江西省瑞金市沙州坝にて）

治部旧址の看板がかかった白壁の建物。周囲は田植えを終えたばかりの水田が気持ち良く広がる。鄧小平はここで主に軍機関紙「紅星報」の編集責任者という地味な職務をこつこつとこなしていた。

これも郷土史家の話だが、鄧は三一年一月に上海から瑞金にやって来て書記に就任したが、三二年五月には瑞金の南方にある会昌、安遠、尋烏の三つの県の書記に転出。そのころ二番目の妻の阿金と結婚している。その後、管轄地域の一部を国民党軍に奪われたことを「日和見主義」と批判される。これが生涯三度の失脚と復活を繰り返した鄧の最初の失脚である。新聞編集の仕事は三三年夏、許されて瑞金に戻って以後、あてがわれた仕事だった。

昼間の小雨がやみ、夜は澄んだ星空となった。大気を汚す工場施設などが皆無なのだ。でも中心部の西端に小規模な工業団地づくりが進んでいた。全国人民代表でもある若い市長さんは、ぜひ企業誘致を成功させたいと語っていたが、わざわざ山の中に進出を希望する企業がどれほどあるだろうかと、いささか気になった。だが改革開放の波に乗り遅れたくないという、革命老区を預かる若い指導者たちの願いもわかる気がした。

宿は一九五〇年代にできた瑞金賓館だった。翌朝、広い敷地内を散歩していたら、他の建物より豪華な造りの一号館の前に出た。玄関に「鄧小平同志、七二年十二月八日から十二日までここに滞在」という説明文を書いた看板がかかっていた。

鄧は文化大革命中の六九年秋から七三年まで二度目の失脚を経験。この時は南昌郊外の新建県のトラクター修理工場で下放労働させられた。当初は幽閉状態だったが、二度目の復活直前の七二年秋から暮れにかけ、お忍びで江西省

内を卓琳夫人と旅行することを許可され、瑞金にも立ち寄った。この時、新聞のガリ版を切っていた総政治部跡も再訪し、お供の人たちに「昔はここで……」といった思い出話を語っていたという。

最後に瑞金で聞いた一つの秘話で拙文を締めくくろう。

瑞金賓館の一号館は五九年夏に訪問が予告されていた毛沢東主席のために特別に建てられた。実現すれば毛沢東が長征のために瑞金を離れて以来、二十五年ぶりの再訪となるはずだった。ところが直前に開かれた廬山会議（五九年七月から八月）で思わぬ政治的波乱が生じ、毛は瑞金の旅をキャンセルした。それから二十年後にその館の主となったのは鄧小平だった。そして毛沢東が再び瑞金を訪れる機会はないままに終わった。

（朝日新聞中国総局長）

『黄鶴楼志』序

馮　天瑜

アジア随一の大河長江は、立ちはだかる巴山の峰々を流れ抜け、瀟湘の雲水を集めて滔々たる大河となって西より流れ来たり、三楚の只中でその最長の支流である漢水と合流し、二大河を挟んで三鎮が向かい合う武漢の壮大な景観を形成する。この地は江漢平原の東端に位置し、鄂（湖北）東南に広がる山岳地帯から続くなだらかな丘陵が平野湖沼の間に起伏し、ちょうど長江と漢水が交わる地点で亀山蛇山が岸を挟んで向かい合い、二山に堰かれた流れが唸りを上げて逆巻く奇観をもたらす。その長江南岸蛇山の西端、黄鵠磯に一座の楼閣が聳える。幾重もの檐が翼を広げ、四方には広々と視界が開ける。万戸が林立する繁華な武昌の市街を背に、滔々たる大河揚子江に臨み、古雅にして清峻なる晴川閣と相対し、山川城郭の勝を尽く会するの感がある。縦目遠眺すれば、更に西には岳陽を控え、東には滕閣を凌ぐ。これぞ江南三名楼の一つとして名高い黄鶴楼である。

黄鶴楼の名の由来には、「山名起原説」「仙人起原説」の二説ある。唐『元和郡県図志』には「呉の黄武二年、江夏に城き、以て屯戍の地を安んずる也。城西、大江に臨み、西南角、磯に因りて楼を為し、黄鶴楼と名づく」とある。一方、